

2022年横浜ナザレン教会・待降節第四主日(12/18)礼拝

「初めの言」

ヨハネによる福音書第一章1節から5節

【聖書】 聖書協会共同訳

ヨハネによる福音書 1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3~4 万物は言によってなった。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった。この命は人の光であった。5 光は闇の中で輝いている。闇は光に勝たなかった。

## 1 印象的な出だし

待降節も四週目を迎えました。日本の多くのプロテスタント教会では、25日の直前の日曜日、つまり待降節第四主日にクリスマス礼拝を捧げるようです。私たち横浜ナザレン教会もそうです。今年は、ちょうど25日が日曜日なので、待降節第四主日礼拝とクリスマス礼拝を別々にささげることができます。今日、待降節第四主日礼拝では、普段読んでいた使徒言行録を離れてヨハネ福音書、第一章のみ言葉に聴いて行きたいと思います。

ヨハネ福音書の冒頭はとても有名な聖書です。がしかし、「最初に言があった」とか、ちょっと分かりにくい、抽象的で観念的な言葉で、私たちの生活には殆ど関係ないことのようにも聞こえます。しかし、そうではないのです。今日の聖書の少し先の14節に「言は肉となつて、私たちの間に宿った」(14節)とあります。冒頭の「言」とは、クリスマスに人間の赤ちゃんとしてこの世界にいられたキリスト・イエスである事は、明らかです。ヨハネは、神は、キリスト・イエスは、どういうお方を、冒頭「最初に言があった」で始まる言葉で歌いあげています。全てのものに命を与える神について、救い主について語っているのであれば、現代を生きる私たちにも深く関係している言葉の筈です。今日は、ヨハネ福音書の冒頭の不思議な言葉に込められた、私たちにも深く関係する意味をご一緒に聞いていきたいと思います。

## 2 「初めに言があった」

「初めに言があった。」この「初めに」とは、まだ世界ができる前、「時間」さえも流れ出す前だ、と言われていています。「太初」「太古」とも訳されますし、聖書の別の箇所では、「永遠の昔」と表現しています。宇宙も万物もまだ何一つ造られていなかった時、既に「言は神と共にあった」とヨハネは歌い出すのです。

「言」と訳されている単語は、原文のギリシャ語では「ロゴス」。聖書の他の場所では、「ロゴス」という単語は、言葉、話、説明、提案、説教などの意味で用いられています。しかし、ヨハネ福音書の冒頭の「ロゴス」は、独特なものです。だからでしょうか、この「ロゴス」は、様々

に訳されています。

英訳聖書は沢山の種類がありますが、よく使われている改訂標準訳(RSV)では、「The Word」。大文字のWで始まる“Word”に定冠詞がついています。「言葉の中の言葉」とでも訳せるでしょうか。日本で最初の聖書、文語訳より前に訳された最初の聖書は、ヨハネによる福音書ですが、中国で活動していたドイツ人宣教師ギュツラフが訳しました。この翻訳には、遭難した三人の少年漁師が係わっていたそうです。そのギュツラフ訳ヨハネ福音書は、「ハジメニ カシコキモノゴザル。」で始まります。「ロゴス」を「カシコキモノ」と訳しました。この「カシコキモノ」とは「知恵」を人間に見立てたものだと言われています。旧約聖書の箴言第八章の知恵の歌に次のようにあるからです。「主はその道の初めにわたし(知恵)を造られた、いにしへの御業になお、先だって。永遠の昔、わたしは祝別されていた、太初、大地に先立って。わたしは産みだされていた、深淵も水もみなぎる源も、まだ存在しないとき。山々の基もまだ据えられてはおらず、丘もなかったが、私は生み出されていた。大地も野も、地上の最初の塵もまだ造られていなかった。私はそこにいた。…」(箴言8:22~25)。

聖書協会の訳では、文語訳から最新の聖書協会共同訳まで同じです。「言語」の「げん」の一字で、「ことば」と訳されています。「言」(げん)の一文字だけで「ことば」と読ませる、「言の葉」と言う漢字を使わなかったのは、意味があるでしょう。「初めにあった」言は、人間の語る言葉ではないからです。人の言葉は、永遠ではありえません。時の彼方に消え失せるもの、時代が変われば形も内容も移り変わるもの。言葉の通りに物事を行えるとも限りません。まさに、「言の葉」、ひらひらと風に吹き飛ばされてどこに行くかも分からない木の葉のようです。

一方、ヨハネ福音書の冒頭の「言」は、永遠の昔から神のもとに存在する神と等しきもの、万物を造る力をもったもの、その内に命を秘めたものであります。人間の語る「言の葉」とは根本的に異なります。

### 3 神は愛された

「言は神と共にあった」、ここは「言は神のもとにあった」と訳す人もいます。実に不思議なことです。聖書の神は、私たち人間とは全く異なり、全知全能のお方、永遠の方。それはどういう事かという、お一人で十分に満ち足りるお方、他者など必要としないお方、と言う事です。しかし、その神が、「永遠の昔」全てに先立って、「言」と共にあることを選ばれました。どういう事なのか。それは、神は、永遠の初めから他者を求めるお方である、という事ではないでしょうか。では、何のために他者を求めておられるのか？繰り返しますが、神はご自身で全てとなりうる存在です、誰も必要としない方です。私たち人間のように、一人では生きていけないから他者を必要とする、というお方ではありません。

ある神学者は、神は、ただ、他者を愛するために、他者を求める、と語りました。聖書が語る「神」というお方は、永遠の昔から「愛」であり、「愛」なくして神であろうとはなさらない方

だ、というのです。ですから「言」、キリスト・イエスは、神の愛が凝縮して生まれた存在と言えるでしょう。神の愛の結果として「言」が生まれ、その言によって万物はなった、と聖書は語ります。つまり、神の愛には、全てをつくり出す力がある、そして命がある、神の愛の内にある命こそ真の命である、とヨハネは謳っています。

では、愛とは何でしょうか？愛を考える時、知り合いの夫婦から聞いた話を思い出します。最初の子どもを宿した妻に対して、医師は告げたそうです。「胎児は障がいをもって生れて来る可能性があります」。夫は動揺しうろたえたそうですが、妻は答えたそうです、「この子がいるだけで、それで私は幸せ」と。それは、「この子がどうあろうと、そこにいるだけで私は、この子の命を愛する」という意味だと思えます。この妻が厳しい現実を知らなかったわけではありません。彼女にはダウン症の弟がいましたから。彼女の両親は、弟を慈しみ愛して大切に育てたようです、そんな両親の姿を見て彼女は育ったから、人を愛することがどういう事かを具体的に知っていたのだと思えます。

「愛」とは、「あなたがどうあろうと、私はあなたがいてくれるだけで嬉しい、その命を喜ぶ」ということでないのか、と私は思います。命に条件をつけないのです。「◎◎だから愛する」のでは、愛ではない。ビジネスです。愛はどんな条件もつけないのです。

ですから、「言の内に命があった。」という言葉は、「愛の内に命があった」と言えるのではないか、と思えます。命は、神が愛し喜ばれる中から生まれるもの、一人の例外もなく。神は、「あなたがどうあろうとも、私はあなたを愛する、あなたがいる事を喜ぶ」と命をお造りになったのではないか、と私は思います。つまり、私たちが今生きている、と言う事は、神が私たちの存在を喜び愛そうとしてくださっている、という証と言えるのではないのでしょうか。

#### 4 闇

一方で、私たちの現実はどうでしょうか。世界の現実はどうでしょうか。今年も又、一年を振り返る季節になりました。2022年の大事件と言え、二月に起こったロシアによるウクライナ侵略が筆頭に上るでしょう。伝えられる残虐行為は目をそむけたくなるようなことばかり。つい最近のニュースでも、ロシアに占領されていたがウクライナ軍が取り戻したヘルソンという町では、子どもに対する拷問部屋が見つかったことが伝えられました。戦闘員でない一般の人びと、しかも子どもまで拷問され殺されていく。戦慄の事実、しかし、それが殺すか殺されるかの戦場の現実です。このような戦争を始めたプーチン大統領、とてもまともな神経とは思えない。

しかし、そんな彼も又、生まれながらに冷酷な独裁者であったわけではありません。彼は、飢えと隣り合わせの厳しい子ども時代を過ごした、と言われています。彼を苦しめた社会から、彼は、「力こそ全てだ」と言うメッセージを受け取り、権力を求めて生きたのではないのでしょうか。彼を呑み込んだ社会の闇はどこから来ているのでしょうか。

私には、忘れられない言葉があります。昔、洗礼を受けてから間もない時、嬉しくなって

「神さまはあなたを愛しているよ」と友人に話したことがあります。すると、話し終わらないうちに厳しい答えが返ってきました。「神がいたとしたら、どうして私の両親は幼い私を残して死んだのか。たとえ神がいて、あなたを愛していたとしても、私を愛してはいない。神は愛だ、なんていうのは幸運なおめでたい人たちだけだ。」そう言われて洗礼を受けたばかりの私は返す言葉がありませんでした。旧友は、中学生の頃、交通事故で両親を失っていました。一人っ子であった彼女は、最初、伯父夫婦に引き取られました。多感な思春期であったこともあり、その家庭になじめずに親戚の間をたらいまわしにされ、大学に入った時点で全ての親戚と連絡を絶ったようです。私はその後も何度か教会に誘いましたが、彼女が応じることはなく、紆余曲折を経て、疎遠となりました。

しかし、彼女を辛い目に合わせ、孤独に追い込んだのは、神ではありません。交通事故を起こしたのは人間です。両親を亡くした彼女を我が子と同じように愛することはできなかったのは、親戚の大人です。彼女自身も心を開くことができなかった。そして、彼女も彼女の周りの人びとも、私たちと大差ない普通の人々。少年プーチンを呑み込み、私の旧友を孤独にした闇をつくり出しているのは、私たち一人一人ではないか、と思うのです。

「この人、いなくなってくれたら、いいのになあ」と考えたことのない人は、いないでしょう。誰も人を否定したり遠ざけたりしたくなかったことがある、他者について嫌な想いになったこと、葛藤を感じたこともある。私自身、神が喜んで造られた全ての命を喜ぶことができているか、と問われれば、俯くしかない者です。私たちは、私たち自身の命さえ、無条件に喜ぶことができない、愛せない時もあります。自死は後を絶ちません。まさしく、命の喜びを見えなくする社会の闇あり人間の闇がある、その中で私たちはどう生きればいいのか分からずにごめいています。人を否定する心、責める心、憎む心、無関心な心、それらは何一つ善きものは生み出さない、憎しみは憎しみや憎しみ以上に惨めで醜いものしか生まないし、無関心は無関心か無関心より冷たいものしか生まない、否定は否定で帰って来るし、責める言葉は人の心を頑なにするだけ。そう分かっているのに、私たちは、自分が辛い目にあうと、憎むし責めるし、攻撃する。自分の生活に不利になるなら、平気で無関心となる。冷たい、無関心で愛のない社会は、この世界の悲惨さは、間違いなく、私たち一人一人が造り出しています。そこでは、お互いの存在を喜び合い尊び合う命もありますが、弱弱いもの、容易に人の闇に呑み込まれて行きます。聖書の語る「闇」は、実に具体的に私たちの内に、私たちの傍らにあります。

ですから、人間が造り出す闇は、互いに愛し合うように、と造られた神の秩序を壊すもの、と言えます。私たち人間が造り出す神の秩序に反する混沌です。人間の力では、この闇に打ち勝つことはできない、と聖書は語ります。それは真実だと思います。いつまでたっても、どんなに科学技術が進んでも戦争はなくなるというのがそのよい証拠ではないでしょうか。人類の歴史は、闇が勝利し続けた歴史のようです。

## 5 光は闇に打ち勝たない



しかし、この世界を支配されているのは、天の御神。どうして愛なるお方が、このような闇の存在を許されているのか、私たちには分かりません。ただ一つはっきりとしている事は、神は私たち人間を一個の存在として尊んでおられる、だから、私たちの自由意思を優先しておられる、のは確かな事だと思います。だからこそ、全知全能、なんでもできるお方にも拘わらず、神は私たちを操り人形のようにはなさらない、私たちを強制的に変えようとはなさらないのだと思います。愛の神である故です。

しかし、いえ、だからこそ、愛である神は、私たちの在り方を強制的に変えるのではなくて、ご自身の在り方を変えたのです。私たちが自分達で作り出す闇に呑み込まれるのはしのびない。罪と死に囚われるのを、深く悲しまれたから。私たちを愛してくださっているから。御自身と等しい、永遠の昔から共にあった「神の言」を、肉において人としたのです。愛なる神から遠く離れて、闇の中で彷徨い滅びるしかない私達を救うために、命の光を私たちに与えてくださいました。それがクリスマスの出来事です。「この命は人間を照らす光であった。光は闇の中で輝いている。」私たちは、この命の光のもとにあって、初めて真の命、神が喜ばれる真の命を知るのではないのでしょうか。この真の命の光は私たちの内の弱弱い光とは異なります。「闇は光に勝たなかった。」とある通りです。

私たちが普段使っている聖書、新共同訳聖書では、「闇は光を理解しなかった。」一方、最新の訳である聖書協会共同訳では、「闇は光に勝たなかった」です。聖書協会共同訳の方が物事に適っているな、と考えたので、今日の礼拝では聖書協会共同訳の聖書の言葉を用いました。この部分のギリシャ語を直訳しますと非常に面白い。「闇は光を自分のものとしできなかった」です。

私たちの内の光は、実に簡単に、たやすく、闇に呑み込まれます。憎しみや無関心、敵意や非寛容、悪意や妬み、嫉み、支配欲、肉の欲にあつという間に支配されます。闇は人を自分のものとするのが得意なのです。

しかし、命の光、神の光は闇のものとなる事は決してない、とヨハネはここで高らかに宣言しているのです。この真の光には闇がありません。100%の光です。闇はこの光を自分のものとはできなかったのです。つまり、この光は、どんなに深く暗い闇でも貫く光だ、と私たちに語りかけるのです。闇の中に消えゆく光ではない、どんな深い淵の底にも届く光。この光が届かない闇などないのです。その光、神の愛である命を与える光が私たちの所に来てくださいました。そうして、私たちを、闇から解放し、命のうちへ、神の愛のもとへと導く、とヨハネは語ります。

「闇は光を自分のものとしできなかった。」ここでヨハネは、「光は闇に勝った」とは言い切っていません。何故でしょうか。真の光、命の光の勝利が確定したのは、イエス・キリストの復活だからです。闇の中にうごめく罪と死に勝利するため、主イエス・キリストは、敵を赦して十字架に架かれ、神の愛に生き抜きました。そして、三日目に甦られる事によって、真の光が死と罪の闇に勝利された事を宣言したのです。

しかし、闇が完全に消え去ったわけではありません。まだ、それは少し先のこと。だからこ

そ、私たちは、この世界にやって来て、私たちの闇に打ち勝ってくださった神の愛の真の光、命の光によって、自分に与えられた戦いを戦うのです。主イエス・キリストは、私たちと共にいて、闇と戦ってくださいます。そして、次のように私たちを励まし、恵みの上に恵みを与えてくださいます。「あなたがたには、世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私は既に世に勝っている。」闇から出て、真の光の主キリストのもとに集いたいと切に願います。